

遊びは非認知能力を育む

—自発的な遊びが非認知能力を育む①—

園長 山崎立哉

乳幼児期に身につけておきたい非認知能力は、数値ではかることのできない「見えない力」ですが、子どもの育ちや「意欲」に大きく関係していることを以前にお伝えしました。

では、非認知能力を伸ばすにはどうすればいいのでしょうか？それは乳幼児期によく遊ぶことです。その遊びは、特別なことではなくて身近な遊びで、子どもが自ら好んで楽しんでやる自発的な活動です。子どもが自分で思いつき進んでやろうとする「自発的な」遊びのことです。親や保育者に指示されて行うことや仕向けられて行う遊びではなくて、やりたいことを自分で見つけて自分で考えて工夫して遊ぶことが自発的遊びと言えます。

例えば、室内での積木遊び。先日、年少児かなりや組の保育室を覗くと数人の子どもたちが積木を床に並べていました。「何作っているの？」と訊くと「迷路つくっているの！」と元気よく答えてくれました。子どもたちは楽しそうに話しながら積み木を並べ、迷路をどんどん広げていきました。

また、室内でのごっこ遊び。年長児ひばり組を覗くと皆でお寿司をいっぱいつくっていました。聞いてみるとお寿司の絵本を読んだりして「お寿司が食べたいね！」という声が多く出て皆で海苔巻き、まぐろ、いくら、卵などいろいろなお寿司をつくったり、中にはポテトやタピオカなども並べて、お寿司屋さんごっこで遊んでいました。牛乳パックやティッシュの箱を使って回転寿司の回転する台をつくったり、お寿司のごはんは花紙で、ねたは色画用紙を切ったりしてつくっていました。保育室に入ると、「へい、いらっしゃい！何のお寿司がいいですか？」と大きな声で訊ねられ、「では、まぐろ下さい！」と答えると「へい、まぐろですね。毎度ありがとうございます。」と元気な声で答えてくれました。

このように、自発的遊びには友達との交わり、自分のやりたいことを実現させるなど、子どもの成長や発達にとっても重要な体験がたくさん含まれています。乳幼児期によく遊んだ子どもは自分で考え自分の意志で行動できる人になります。友達との関わりを通して適切な力加減や言葉の加減を学び、他の人の思いに気がつくようになってきます。